

平成29年度

自己点検・評価書
(学校評価報告書)

附属幼稚園

1 附属幼稚園の現況

(1) 学校名

大阪教育大学附属幼稚園

(2) 所在地

大阪府大阪市平野区流町2-1-79

(3) 学級数・収容定員

6級(1学年2級) 収容定員150人 (1学級30人 ただし3歳児は16人と14人)

(4) 幼児・児童・生徒数

147人 (男児73人 女児74人)

(5) 教職員数

園長(併任) 1人、副園長 1人、主幹教諭 1人、教諭 6人、養護教諭 1人、非常勤講師 2人
事務職員 1人、臨時用務員 1人、スクールカウンセラー 1人
栄養士 1人、調理師 1人

2 附属幼稚園の特徴

本園は、都会の中にありながら、豊かな自然環境の中で身近な人々とのあたたかい触れ合いや、生き物たちとの日々の関わりを通して、やさしく、あたたかく、思いやる心が育つことを願っている。

幼稚園生活の主人公は幼児であり、幼児の思いや願いを大切に生活を中心としている。幼児は遊びを通して様々なことを学んでいる。遊びこそが幼児の生活そのものであり、今日の幼児の姿から明日の生活がつくり出されていく。常に幼児の今の姿を出発点として、個々の育ちや発達の状況、その時期にふさわしい遊び(生活)が展開されていくよう、努めている。

また、昭和23年より保護者手作り給食を実施しており、約70年間にわたって受け継がれている。子どもたちに手作りの温かいものを食べさせてあげたいという願いと共に、食の安全や衛生、アレルギー対応など、時代の変化に応じた給食作りを目指している。

3 附属幼稚園の役割

- (1) 学校教育法に基づく幼稚園教育を行う。
- (2) 幼稚園教育の理論と実践に関する研究を行う。
- (3) 本学学生の教育実習を行い、その指導を行う。
- (4) 地域社会における幼児教育の振興に寄与する。

4 附属幼稚園の学校教育目標

「すこやかに あたたく 遊びに生きる子ども」

○ 3歳児・・・喜んで幼稚園へ来る子ども

生後わずか3年しかたっていない子どもであるが、一人の人間としてすばらしい力を持ち、一人一人がその子らしさを秘めている時期である。この1年をゆったりと大好きな先生に寄り添い、自分の好きな遊びに没頭し、明日も大好きな幼稚園に行こうと思うことが、これからの保育年限における健やかな育ちを期待する上で何よりも大切なことであるとする。

○ 4歳児・・・友達を見つけて、幼稚園の生活を楽しむ子ども

友達の存在に心を揺り動かし、幼稚園では「いろいろな友達がいる」「一人より友達と一緒に生活が楽しい」「友達と関わり合って育つ」等の体験をしながら、幼稚園生活の楽しさを味わい、思う存分遊ぶ子どもに育つことを願っている。

○ 5歳児・・・友達と心を通わせ、様々な生活に熱中する子ども

心身ともにたくましく、知的好奇心もぐんと増す時期である。試行錯誤を繰り返しながら全力で幼稚園の様々な生活に熱中し、一人でも、みんなとでも「やったね」という成就感を味わい、友達と力を合わせて楽しい園生活をつくり出す子どもに育つことを願っている。

5 附属幼稚園の学校教育計画

1 人間尊重の教育

幼児一人一人の人権を守り、将来豊かな心で、生きる喜びを感じ、差別を克服し、困難に立ち向かう、しなやかな心と体をもった人間の育成に努める。

2 基本的な生活習慣の形成

幼児の行動を見守りながら、必要な時期に教師自身がモデルとなって援助したり励ましたりしながら、幼児が園生活にとって必要な行動であることを自覚し、自ら身に付けていくことを願っている。

3 道徳性の芽生え

園生活の中で、自分以外の友達や身近な人との関わりを通して他人の存在に気付き相手を尊重する気持ちを育てることから始まると考える。また、園内の豊かな自然環境や飼育動物との共生の中で、思いやりや責任感など人間性の根幹にふれる体験を大切にしよう努めている。

4 身近な物の扱いと基礎的な技術や技能の習得

幼児の生活が、より楽しく、より心地よく、より便利に、より目的に向かって充実するために必要な遊具や用具がある。これらの扱いを幼児自身が必要と感じた時に逃さず身に付けていくことと、3年ないし2年間の園生活の中で出会うことができるよう、指導計画の中に位置付けることとしている。

6 附属幼稚園の平成29年度 重点目標(評価項目), 具体的な取組内容(評価指標)・評価結果

評価の基準

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標	「すこやかに あたたく 遊びに生きる子ども」
学校教育計画	1 人間尊重の教育

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 一人一人の幼児 が自分らしさを発揮 し、友達と関わる楽 しさを味わえるよう にする。	一人一人の幼児の 気持ちに寄り添った 関わりを教師が心掛 ける。また、一人一人 の遊びの充実と共に、 友達と互いのよさに 気付けるような仲間 づくりに努める。	幼児の行動を肯定的に捉えるこ とで、幼児が安心感をもって園生 活を送るようになった。また、教 師の個々の幼児への関わりを見 て、友達同士いろいろなことを教 え合ったり、困ったときには助け 合ったりする姿が多く見られるよ うになった。さらに、保護者との 連携を深めることで、家庭と園が 一貫した関わりができるようにな ってきた。	一人一人の幼児がありのま まの姿を出せるように教師 が、幼児のいろいろな姿を受 け止め、先の姿を見通しなが ら援助していくことが大切だ と考える。そのためにも、教 師自身が幼児の発達について 学び、それを家庭と共有して いくことも大切だと考える。	B	幼児が自分の気持ちを 表現するところで、教師が 何を大切にするかを明確 にすることが大切ではな いか。いざこざまでのプロ セスを大切に、その子な りの対応をすることが大 切ではないか。	B	一人一人の個性を大切に し、多様性を認め合える集 団としていきたい。そのた めにもいろいろな人と関わ る機会を設け、相手の立場 に立って考えられるように 教師自身が、まず、幼児の行 動の意味を考えるようにし ていきたい。
(2) 教職員間の情報 交換を密に行い、 幼児の内面の育ち について共通理解 する。	日常的に幼児の姿の 情報交換を行う。ま た、定期的に全教員で 特定の幼児の内面の育 ちについて話し合っ たり、支援会議を開い たりする。	担任の幼児の捉え方だけで なく、全教員で情報交換すること により、幼児の成長を多面的に 捉えられるようになった。特に 支援の必要な幼児に関しては外 部からの専門科にも助言をいた だき、内面理解が深まった。	必要に応じて教職員間の情 報交換はできているが、定期 的な話し合いをもつ時間を確 保することが難しかった。ど のような形で情報交換すると 無理なく継続できるか考え、 改善していきたい。		一人一人の教師が気付 いたことをメモにしてた めていくこともできるの ではないか。また、あえて 全体でなくても、幼児の 成長に寄り添っているよ うに感じる。		幼児の内面理解を深める ために、日々の情報交換に 加え、特定日(例えば学期に 1回)に拡大した支援会議を 行うなど、会議の持ち方を 工夫したい。

学校教育目標	「すこやかに あたたく 遊びに生きる子ども」
学校教育計画	2 基本的な生活習慣の形成

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 一つ一つの生活習慣について必要感が分かり、丁寧に出来る幼児を育む。	発達年齢に応じて、なぜ必要かを分かりやすく指導する。また、養護教諭と連携しながら継続して指導することで、習慣付くようにする。	生活習慣が身に付くために年齢に合わせた環境を構成することで、自ら身の回りの始末などを行う幼児が増えた。養護教諭が定期的に視覚物を使って指導し、担任と連携することで、丁寧にやる幼児が増えてきている。	生活習慣は年齢が上がる毎に、慌てて丁寧に欠けるようになってくる。その年齢に合わせた指導の工夫をし、必要感を感じながらやるようにしていきたい。		小さいうちに生活習慣を身に付けることは、その後の生活に生きてくる。繰り返し伝えることが大切ではないか。		今後も、担任教師だけでなく、養護教諭とも連携しながら、幼児に必要な生活習慣が身に付くようにしていきたい。また、自分で意識しながらやるように視覚的な環境を整えていきたい。
(2) 災害時には幼児も教師も、落ち着いて考えて行動できるようにする。	避難訓練では様々な状況を想定し、教師も幼児も緊急時にどのように行動すればよいのかを、考えられるようにする。	今年度は中学生と一緒に洪水の訓練、防災ずきんを使用した訓練など新たな取り組みができた。訓練の想定を多様にすることで、教師も幼児も、よく考えて落ち着いて行動できるようになってきた。しかし、幼児は担任の指示を仰ぐと担任の傍に避難する傾向があるので、教職員間の連携を密にし、幼児の安全をより早く確保する必要がある。	今回取り組めた中学生との訓練や防災ずきんの使用も、実際に災害が起きた場合の混乱時でも、機能できるようにする。また、訓練の想定をさらに多用にし、教師の役割分担を明確にする。	A	防災については園だけでなく、家庭でも意識できるように啓発していくことも必要ではないか。例えば、家にも防災ずきんを用意したり、避難経路を確認しておいたりすることで、幼児の意識は高まるのではないか。	A	園で行っている防災や防犯の取り組みを保護者にもさらに伝え、家族で意識を高められるようにする。 中学生との避難訓練は継続して行い、さらに地域住民とも連携して行えるように取り組みたい。

学校教育目標	「すこやかに あたたかく 遊びに生きる子ども」
学校教育計画	3 道徳性の芽生え

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 幼児が友達と関 わる中で葛藤やつま ずきを体験し、自分 の思いを出したり、 相手の思いに気付い たりできるようにす る。	友達との関わりの 中でいざこざが起き た時に、自分の思いを 言葉で話したり相手 の思いを聞いたりす る機会を大切にする。 また、個々の幼児の 育ちだけでなく、互い を認め合えるような 集団づくりを心掛け る。	自己主張が強い幼児には、相 手の気持ちを落ち着いて聞く機 会を多くもてるよう心掛けた。 また、逆にいざこざを避けよう とする幼児には、まずは自分の 思いを相手にしっかり出せるよ うに、日々の保育で励ましてい った。いろいろな出来事を該当 幼児だけで話し合うのではな く、クラスの皆で話し合う機会 をもつことで、第三者の幼児も 自分のこととして考え、集団と して高まっていくようになった。	一人の幼児の葛藤やつま ずきを集団の課題として教師が 意識することで、集団として 高まることにつながった。一 方、つまずきや葛藤を経験す ることが少ない幼児もいるの で、教師が意識してそのよう な状況をつくり出すことも必 要だと感じる。	B	一人一人の幼児が自分ら しさを発揮して生活してい る。それが基本となり、相 手の思いを尊重することに つながっているのではない か。	B	一人一人の幼児の育ちを 丁寧に見取り、友達と関わ る中で、自分の思い通りに いかないことや、我慢しな ければならない経験を積み 重ねられるようにしたい。 また、集団としてどのよう に育んでいきたいかという ことを教師自身も意識し、 学級経営をしていくように していきたい。
(2) いろいろな人と 関わり、人と関わる 楽しさを味わう。	異年齢の友達や他 校種の人、地域の人と 関わる機会を設け、自 分の周りにはいろい ろな人がいることに 気付けるようにする。	日々の生活ではクラスや学年 を超えて、いろいろな友達と自 然に遊ぶ姿が見られた。他校種 の人との関わりは継続すること が難しかったが、地域の高齢の 方と触れ合う機会ができた。	教師が意識していろいろな 人と関わる機会を設けていく ことが必須である。交流は相 手とのやりとりに時間が必要 となるが、工夫しながら今後 さらに広げていきたい。		地域の方との交流では 行って何かをすることは できるが、深まった交流 をすることが難しい。ま た、障がいのある方な ど、いろいろな人との関 わりをさらに増やしてい く必要もあるのではない か。		次年度は地域の方のふれ あい喫茶に出掛ける機会を 増やしたり、未就園児の園 庭開放を行ったりなど、地 域の方と交流を深め、いろ いろな人と関わる楽しさを 味わえるようにしていきたい。

学校教育目標	「すこやかに あたたく 遊びに生きる子ども」
学校教育計画	4 身近な物の扱いと基礎的な技術や技能の習得

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 教材研究を積極的に 行的に行い、幼児の発 達に合わせて環境を 構成することで、遊 びがより楽しく、充 実していくようにす る。	幼児の発達にあった 遊具や道具についての 教材研究を深め、準備 を進めながら、タイミ ングを逃さず投げ掛け るよう配慮する。ま た、その扱い方は教師 がモデルとなるよう心 掛けていく。	教育課程・指導計画の改訂に 向けて幼児の発達に合わせた経 験について考え合ったり、教師 自身が学ぼうとする機会が増え たりした。それにより、タイミ ングよく遊具や道具を提示した り、教師が手作りで遊具を用意 したりできた。また、教材研究 を行うことで、幼児の遊びがよ り充実した。 教材研究について教師同士で 研鑽を深め合えることはできな かった。同学年担任同士の意見 交流にとどまった。	教師自身が幼児の遊びを見 通し、環境を構成することが 大切である。そのためにも教 材研究を積極的に行い、発達 や遊びに合わせた教材を幼児 に提示していけるようにさら に研鑽を深める必要がある。 一人一人の教師が教材研究 を深めつつも、教師同士で意 見交換することで互いに高め 合える。その時間を意識的に 確保していくことが必要だと 思われる。	B	環境は工夫し、様々な活 動を園生活の中に入れてい ると思う。教師が環境構成 をするのは午後になると思 うので、工夫してその時間 を確保していけるようにす ることが必要ではないか。	A	教師だけでなく、幼児と 共に環境を構成することも 大切にしていく。また、教 師にはそれぞれ得意分野が あるので、それを他の教師 に伝えるなど教師同士が学 び合うことも必要である。 教育課程・指導計画の見直し・作成を次年度もさらに 進めるので、その中で、同 学年の教師同士だけでな く、学年を超えて、研鑽を 深めていきたい。

